

変形性関節症に対する理学療法の 多施設間共同研究実践モデル

加藤 浩*

Hiroshi KATO, SBJPT, PhD

大平 高正**

Takamasa OHIRA, RPT, PhD

池内 秀隆***

Hidetaka IKEUCHI, PhD

1. 変形性股関節症患者の歩行能力障害を改善させるために必要な筋の質的機能評価に関する多施設間共同研究について紹介した。
2. 大学と臨床施設の連携により構築される共同研究環境は非常に価値が高いことを述べた。
3. 臨床研究をデザインする上で必要な患者への「倫理的配慮」についてのポイントを述べた。
4. 臨床研究は環境が整っている人がするのではなく、セラピストの臨床研究に対する意欲と探求心が重要であることを述べた。

はじめに

筆者は理学療法士の資格を取得後、大学病院に就職し、12年間の臨床経験を積んだ。その後、教育・研究現場に異動し、今年で6年目を迎える。そして、これまでの18年間の仕事の中で、臨床現場と教育・研究現場で一貫して大切にしてきた流儀がある。それは「臨床研究」へのこだわりである。理学療法は言うまでもなく、臨床現場から生まれた臨床の学問、すなわち「実学」である。それゆえ筆者は、日々の臨床で直面してきた問題が、そのまま自身の研究テーマとなり、そして、障害を持つ患者本人に直結することを重視してきた。できるだけ臨床の現実に近い研究をしたかったからである。しかし、筆者が以前所属していた大学は、研究機器および環境には極めて恵まれていたが、附属病院などの臨床施設を併設していなかったため、大学内で臨床研究を継続することは

*九州看護福祉大学看護福祉学部リハビリテーション学科

(〒865-0062 熊本県玉名市富尾 888)

**大分県立病院リハビリテーション科

***大分大学工学部福祉環境工学科

困難であった。そこで、大学の外に目を向け、志を共にする臨床施設のセラピスト（以下、臨床セラピスト）と協力・連携することで、臨床研究の実践を可能にしてきた（図1）。本稿ではその共同研究実践モデルの一部を紹介する。

研究テーマの設定

① 研究テーマ

本稿で紹介する研究テーマは「変形性股関節症患者の歩行能力障害を改善させるために必要な筋の質的機能評価に関する研究—力学的・電気生理学的・筋の組織形態学的側面からの多次的解析」とした。研究テーマの背景について述べていこう。

② 研究の背景

近年、厚生労働省の指導により医療機関の在院期間は短縮の流れにあり、理学療法もより効率的・効果的に行うことが強く求められている。しかし、現状をみると科学的根拠に基づいた理学療法サービスが十分提供されているとは言い難い。例えば、整形外科疾患の廃用性筋萎縮に対する筋力強化として、主に重錘負荷によるトレーニングのみを実施している臨床施設は少なくない。しかし、これら筋力強化により、ある程度筋力の回復が得られ